館林市埋蔵文化財発掘調査報告書　第24集

館林市内遺跡発掘調査報告書

TATEBAYASHISHINAI ISEKI

1 9 9 2

館 林 市 教 育 委 員 会

館林市内遺跡発掘調査報告書

１　９　９　２

館　林　市　教　育　委　員　会

例　　言

1. 本書は平成４年度に実施した館林市内の遺跡発掘調査の結果をまとめたものである。
2. 調査は館林市教育委員会が主体となり実施したもので、その組織は次のとおりである。

教育長	髙瀬利一
教育次長	田村粋男
主管課	館林市教育委員会　文化振興課　文化財係
文化振興課長	江森勝一
文化財係長	早川紀正
主任	川島孝男（担当）
主事	戸叶俊文
調査補助	寺内景子
作業員	石井悦雄　石川栄吉　近藤久美子 寺内義正　中井貞次　林　正行 松本末吉

3. 調査に伴う諸経費は、国及び群馬県より補助金を受け館林市が負担した。
4. 調査による出土遺物、調査記録、資料は館林市教育委員会で保管した。
5. 本書の取りまとめは、川島が中心となり行なった。
6. 本書の図版作成、トレースは寺内（景）が中心となり行なった。
7. 調査ならびに本書の刊行にあたり、群馬県教育委員会文化財保護課若林正人氏をはじめ関係諸氏、機関の御指導を賜りました。厚く御礼申しあげます。

《目　　次》

例　　言
第Ⅰ章　館林市の環境 …… 1
位置と地形 …… 1
館林市内の遺跡 …… 3
第Ⅱ章　各遺跡の内容 …… 5
第1節　町谷1遺跡 …… 5
第2節　南近藤遺跡 …… 9
第3節　北大島館跡 …… 17
第4節　大袋城遺跡 …… 22
抄　　録 …… 32

《図　版　目　次》

第1図　館林市の地形と調査された遺跡 …… 2
第2図　住居址の確認された遺跡と城館址 …… 4
第3図　町谷1遺跡周辺図 …… 5
第4図　〃　調査区全体図 …… 8
第5図　南近藤遺跡周辺図 …… 9
第6図　〃　調査区全体図 …… 12
第7図　〃　5号住居址 …… 15
第8図　〃　5号住居址出土遺物 …… 16
第9図　北大島館跡周辺図 …… 17
第10図　〃　略測図 …… 18
第11図　〃　調査区全体図 …… 21
第12図　大袋城遺跡周辺図 …… 22
第13図　〃　略測図 …… 23
第14図　〃　1号住居址 …… 25
第15図　〃　1号住居址出土遺物 …… 26
第16図　〃　2号住居址 …… 29
第17図　〃　調査区全体図 …… 30

《写　真　目　次》

写真 1　町谷１遺跡調査前 …… 6
写真 2　〃　調査作業 …… 6
写真 3　〃　１トレンチ …… 6
写真 4　〃　２トレンチ …… 7
写真 5　〃　土坑 …… 7
写真 6　〃　調査区全景 …… 7
写真 7　〃　３トレンチ …… 8
写真 8　〃　土坑 …… 8
写真 9　南近藤遺跡調査前 …… 10
写真10　〃　重機による掘削 …… 10
写真11　〃　調査作業 …… 10
写真12　〃　５号住居址遺物出土状況 …… 11
写真13　〃　５号住居址カマド周辺遺物出土状況 …… 11
写真14　〃　５号住居址カマド …… 11
写真15　〃　５号住居址 …… 12
写真16　〃　５号住居址 …… 13
写真17　〃　調査区全景 …… 13
写真18　〃　調査区全景 …… 14
写真19　〃　５号住居址出土遺物 …… 14
写真20　北大島館跡調査前 …… 18
写真21　〃　重機による掘削 …… 18
写真22　〃　調査作業 …… 19
写真23　〃　１トレンチ …… 19
写真24　〃　２トレンチ …… 19
写真25　〃　３トレンチ …… 20
写真26　〃　調査区全景 …… 20
写真27　〃　出土遺物 …… 20
写真28　大袋城遺跡調査前 …… 23
写真29　〃　調査作業 …… 23
写真30　〃　１号住居址遺物散布状況 …… 24
写真31　〃　１号住居址遺物出土状況 …… 24
写真32　〃　１号住居址 …… 24
写真33　〃　１号住居址出土遺物 …… 26
写真34　〃　１号住居址出土遺物 …… 26
写真35　〃　調査区全景 …… 27
写真36　〃　２号住居址遺物散布状況 …… 28
写真37　〃　２号住居址 …… 28
写真38　〃　調査区全景 …… 28

第Ⅰ章　館林市の環境

位置と地形

館林市は、群馬県の南東部、関東平野の北辺に位置する総面積60㎢余り、人口約77,000人を擁する東毛と呼ばれる当地方の中核都市の一つである。市域は東西15㎞、南北８㎞と東西に長く、北は渡良瀬川を隔てて栃木県に、東は邑楽郡板倉町を経て渡良瀬川遊水池で茨城県に、南は邑楽郡明和村を経て利根川で埼玉県に、西は邑楽郡邑楽町とそれぞれ接している。また、県都前橋市まで約50㎞、首都東京までは東武鉄道伊勢崎線で浅草まで約65㎞、東北自動車道では館林インターから都心まで60㎞余りと、首都圏との結びつきも強い。

次に地形的に本市を概観すると、洪積地（洪積台地・内陸古砂丘）と沖積地（自然堤防・沖積低地・湿地・池沼・河川等）に大別され、県下でも地盤の低い地域に属している。

洪積地は、本市中央部を東西の帯状に延びる台地となっており、「邑楽・館林台地」と呼ばれ、太田市の高林から大泉町、邑楽町を経て館林市に達し、更に東の板倉町へと続いている。本市における標高はおよそ18ｍ～25ｍである。その構成を見ると、河川の堆積物とされる礫、砂、シルトの互層の上に、中部及び上部ロームの二層が堆積し、形成時期は下末吉海進時に遡るとされている。

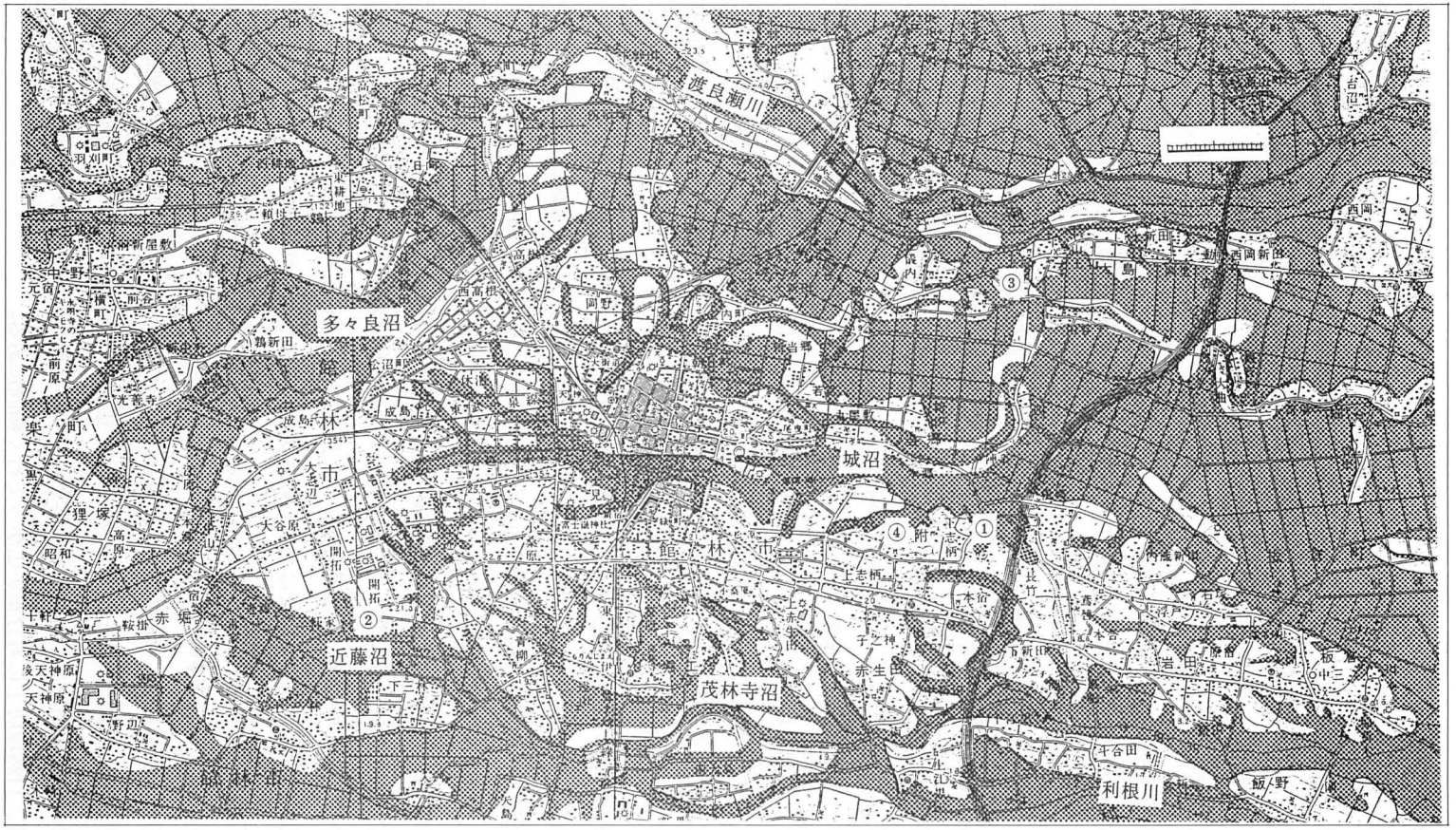
また、この台地の西側から北側の縁に沿って、埋没河畔砂丘（内陸古砂丘）が走っている。幅約200ｍ、洪積台地からの比高は５ｍ前後で、大泉町古海から本市の高根に至る約13㎞にわたっており、本市の最高点はこの埋没河畔砂丘上にある。形成時期については、やはり下末吉海進時からその後の海退の時期に遡るといわれ、内陸部におけるわが国最古のものである。

そして、この「邑楽・館林台地」を取り囲むように、利根川及び渡良瀬川の氾濫原である標高14ｍ～16ｍ前後の沖積地が広がっている。この沖積地を区分すると、北部の渡良瀬川沿岸地帯、南部の利根川沿岸地帯の二地帯に分けることができる。この沖積地には広大な低湿地が広がり、大小の池沼が点在していた。また、この中には旧河道が残り、これに沿って自然堤防が発達している。

こうした台地や低地などからなる本市の地形には、北西から南東へ向けて緩く傾斜する傾向が見られ、台地面と低地面との比高差も北部で大きく南部では小さくなっている。これは、埼玉県の北東部に中心を持つ関東造盆地運動の影響によるものと考えられる。

洪積台地はまた、沖積低地へ延びる多くの谷地により樹枝状に開析されている。その中でも、市内最大の谷は鶴生田川から城沼へかけてのもので、台地を南北に二分し、更に浅い谷が枝分かれするように延びている。こうした洪積台地を開析する谷には、ほかに茂林寺沼、蛇沼等の池沼を伴うものなど大小様々なものがあり、本市景観上の特徴の一つになっている。

第１図　館林市の地形と調査された遺跡



①　町谷１遺跡　　②　南近藤遺跡　　③　北大島館跡　　④　大袋城遺跡

館林市内の遺跡

館林市内における遺跡数は、昭和５８年から６３年にかけて実施された市内遺跡詳細分布調査の結果である「館林市の遺跡」によれば、144ケ所の遺跡が推定されている。これは、現地踏査により遺跡としての可能性を推定したものであるが、内訳を見ると、旧石器時代―３、縄文時代―13（縄文時代の遺物のみ散布）、弥生時代―０、古墳から平安時代を含むもの―96（うち縄文時代の遺物散布の見られるもの23）、古墳―17（推定を含み延べ25基）、中世生産址―１、中世城館址―12（伝承地を含む）、近世城館址―２となっている。

「館林市の遺跡」を基にした遺跡の分布は、本市中央部の台地に接する池沼、低湿地との密接な関わりを示している。この分布は、沼、低湿地を核にした幾つかのブロックに分けることができ、ブロックごとに遺跡の時代別傾向に違いが見られる。

本市東部に東西に延びる城沼周辺には、今年度調査された町谷１遺跡、大袋城遺跡をはじめ20以上の遺跡が推定され、時代別の傾向では、城沼北岸、南岸の東部と西部の三つに分けることができる。北岸では山王山古墳を含む善長寺付近遺跡ほか古墳・平安時代を中心とした遺跡の分布が見られる。南岸東部では、富士山古墳、今年度古墳時代の住居址の確認された大袋城遺跡など、古墳時代が中心となっている。南岸の西部では、昭和５５、５６年度に調査され縄文時代の住居址が確認された大袋Ⅱ遺跡をはじめ縄文時代の遺跡が分布している。

次に南部の蛇沼周辺では、昭和５７年度の調査で縄文時代の住居址が確認された間堀遺跡をはじめ６ケ所の遺跡があり、縄文時代の遺跡が分布している。

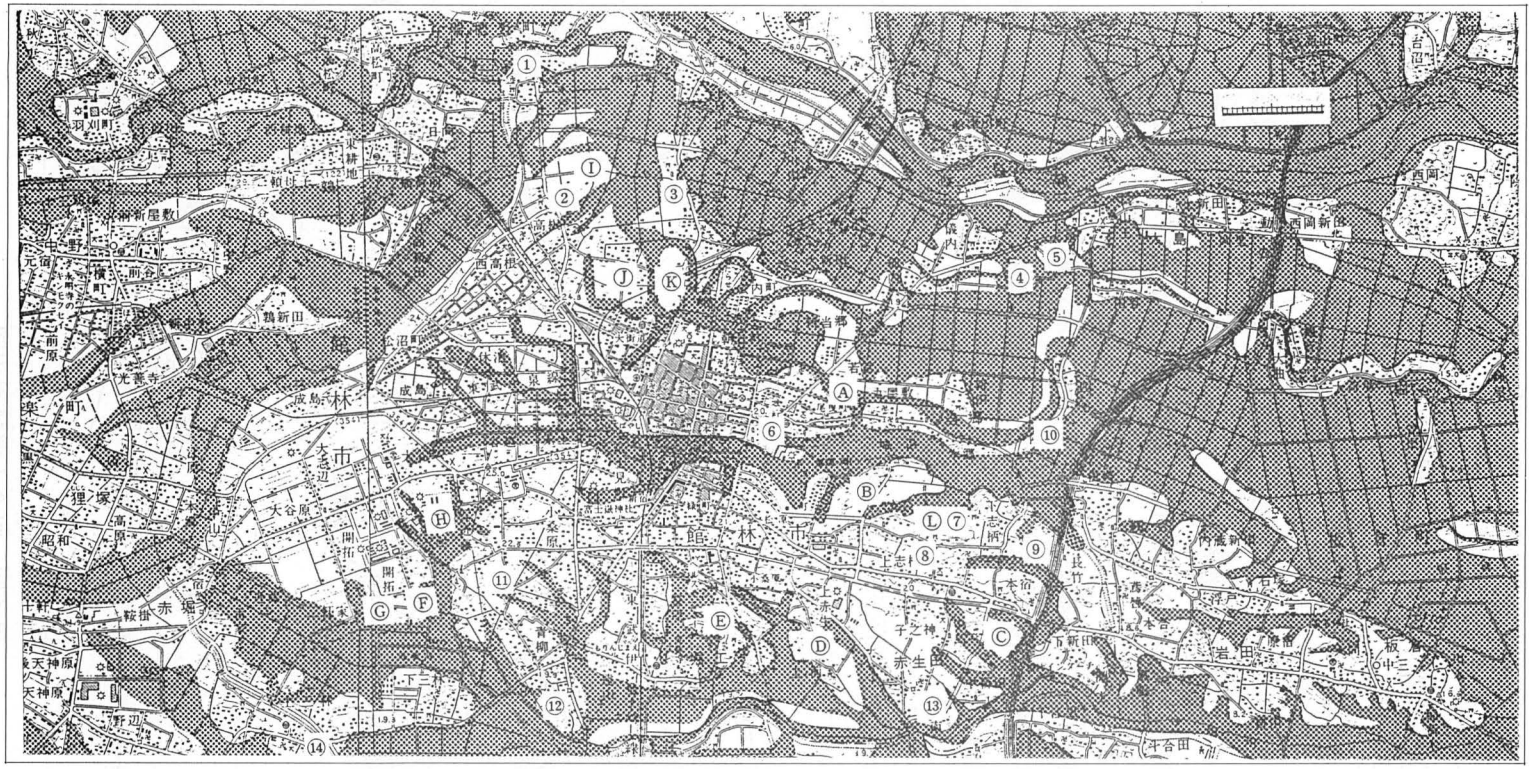
この蛇沼を伴う開析谷の西には、茂林寺沼が広がっており、これを取り巻くように10ケ所に遺跡が推定されている。時代別の傾向では、沼の東側では大原道東遺跡ほか縄文時代が中心となり、西側では、前通遺跡、中山東遺跡など平安時代の遺跡が分布している。

また、南西部の近藤沼では、近藤沼へ続く北方の開析谷も含めた周辺で10ケ所の遺跡が分布し、沼の周辺では、今年度調査され古墳時代の住居址の確認された南近藤遺跡のほか北近藤第一地点遺跡など古墳時代の遺跡が中心となっている。北方の開析谷の周辺では、伝右ヱ門遺跡をはじめ縄文、古墳時代を含む遺跡となっている。

このほか北部の旧河道沿いでは、平安時代を含む遺跡が多いが、全体的な傾向は捉え難い。また、南東部の洪積台地を刻む数本の開析谷周辺では、古墳を含め20を越える遺跡が推定されているが、多くが平安時代の遺跡である。

これらのことから窺える遺跡分布上の特色として、時代別には縄文時代の後・晩期から弥生時代、古墳時代初頭へかけての遺跡が少なく、立地では縄文時代、古墳時代の遺跡が低地に面する台地斜面、台地上など台地の縁辺に多く分布し、奈良・平安時代になると遺跡数も増加し台地内部、自然堤防上にも分布が広がって行く傾向にある。

第２図　住居址の確認された遺跡と城館址



住居址

Ⓐ　尾曳町１遺跡
Ⓑ　大袋Ⅱ遺跡
Ⓒ　赤生田道満遺跡
Ⓓ　間堀遺跡
Ⓔ　下堀工道満遺跡
Ⓕ　北近藤第一地点遺跡
Ⓖ　南近藤遺跡
Ⓗ　伝右ヱ門遺跡
Ⓘ　高根・外和田遺跡
Ⓙ　岡野・屋敷前・岡遺跡
Ⓚ　八方遺跡
Ⓛ　大袋城遺跡

城館址

①　木戸城跡
②　高根城跡
③　蛇屋敷跡
④　磯ケ原城跡
⑤　北大島館跡
⑥　館林城跡
⑦　大袋城遺跡
⑧　青山屋敷跡
⑨　白旗城跡
⑩　羽附陣屋跡
⑪　近藤陣屋跡
⑫　青柳城跡
⑬　侍辺城跡
⑭　三林城跡

第Ⅱ章　各遺跡の内容

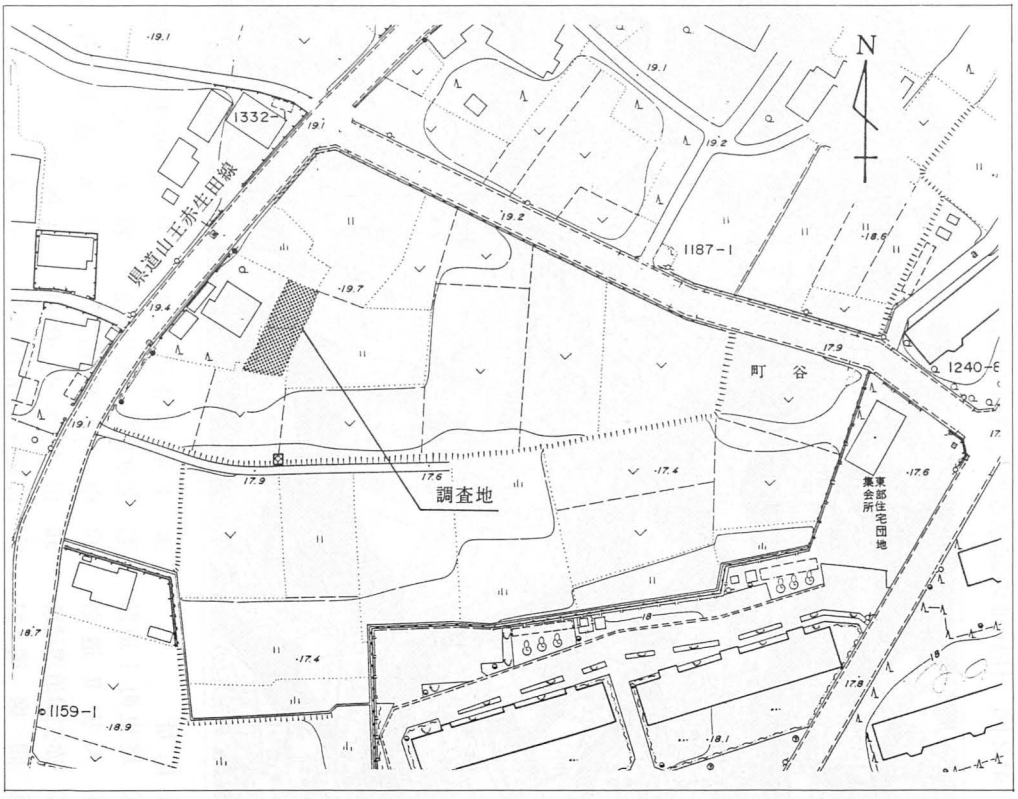
第1節　町谷1遺跡（まちやいちいせき）

立地と環境

町谷1遺跡は、館林市東部を南北に走る県道山王赤生田線の東側に面し、東部市営住宅団地の西側に、谷を一つ隔てて広がる遺跡である。この谷は、邑楽・館林台地を開析する谷の一つで城沼南東部の低地から南方の台地へ袋状に延びており、遺跡地はこの谷の北側台地上に位置している。

「館林市の遺跡」には、土師器散布の見られる埋蔵文化財包蔵地として登載され、周辺には平安時代の町谷3遺跡、古墳及び平安時代の町谷2遺跡、縄文及び平安時代の大袋4遺跡、縄文時代の下志柄遺跡、古墳では下志柄古墳、町谷1号墳、町谷2号墳、中世城館址として白旗城跡がある。

この地域には古くからの集落が点在し、東北自動車道館林インターにも近いが、田園に囲ま



第3図　町谷1遺跡周辺図

れたのどかな景観を残している。

経　緯

町谷１遺跡の調査は、館林市楠町字町谷1180－３及び1180－４の地権者株式会社協栄の一般開発に伴う事前確認調査であった。

館林市教育委員会では、この土地の埋蔵文化財の取り扱いについて同社より問い合わせを受け、協議を始めるとともに現地確認を行なった。

開発予定地は遺跡地の中央に位置し、標高約20ｍの前述の谷に面する台地上で畑地となっていた。現地では遺物の散布は見られなかったものの、隣接地では土師質の土器片の散布が見られ、既往の発掘調査例がなく、遺構の存否等地下の状況把握を要すると判断されたため、この結果に基づく協議を行ない、試掘調査を実施することで合意された。

調査の概要

調査は、南北のトレンチ１本とこれに直交する２本のトレンチの３本により進めた。また、南北のトレンチの東側には土層観察のためサブトレンチを設定した。

この結果、地表から地山となっていたローム面までは0.1～0.2

写真１　町谷１遺跡調査前

写真２　町谷１遺跡調査作業

写真３　町谷１遺跡１トレンチ

mの厚さの耕作土で、耕作土の直下がローム層となっていた。土層断面ではローム面はほぼ水平に直線的に延びていたことから、ローム層を削平する土地改変のあった様子が窺われた。

遺構としては、1及び2トレンチの交差付近より土坑が1基検出された。トレンチ内に現われたこの土坑に伴う土層の変化は、当初南側がトレンチ外へ延びており、遺構の形状を確認するため一部トレンチを拡張し精査した。その結果、東西1.1m、南北2.9m、深さ0.9mの規模を持つ長円形の土坑であることが確認された。長軸はほぼ南北方向となっており、内部は北側でオーバーハングしていた。土坑内には落し穴等に伴う痕跡は検出されず、覆土にはこの土坑の性格・築造時期を比定し得る遺物の出土はなかった。

また、1及び3トレンチの交差部分にも土層の変化が見られたが、精査の結果、薄い表土を掘り込んだ耕作に伴うものであると判断された。

出土遺物については、調査区全体から土師質土器片、縄文土器片等若干が出土したのみで、特筆すべきものはなかった。

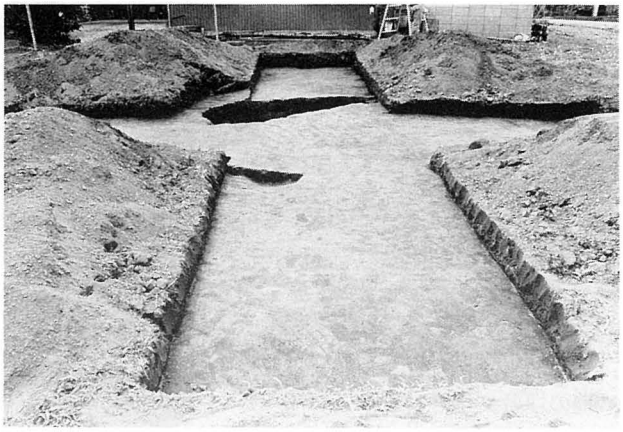


写真4　町谷1遺跡2トレンチ

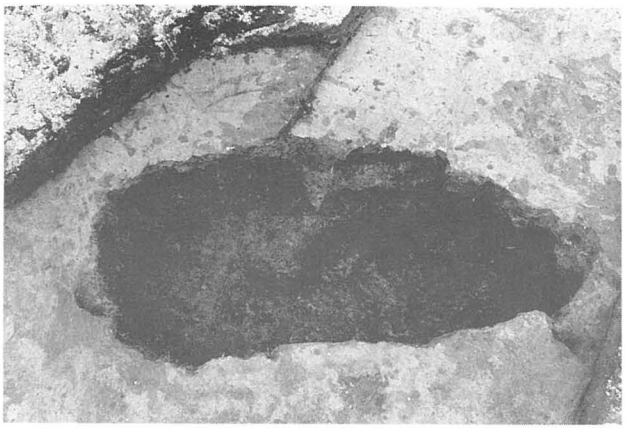


写真5　町谷1遺跡土坑

写真6　町谷1遺跡調査区全景

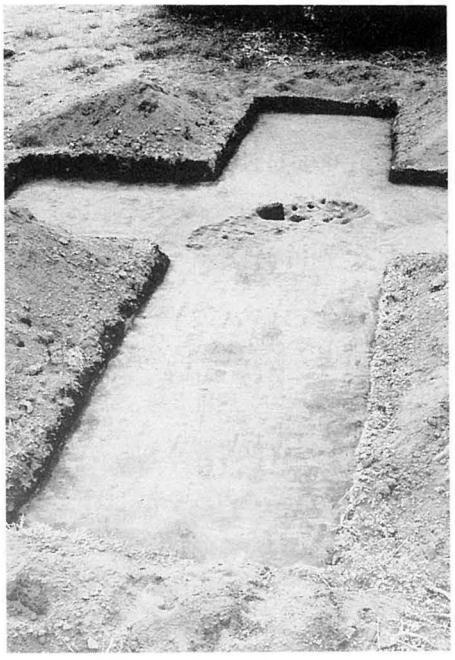
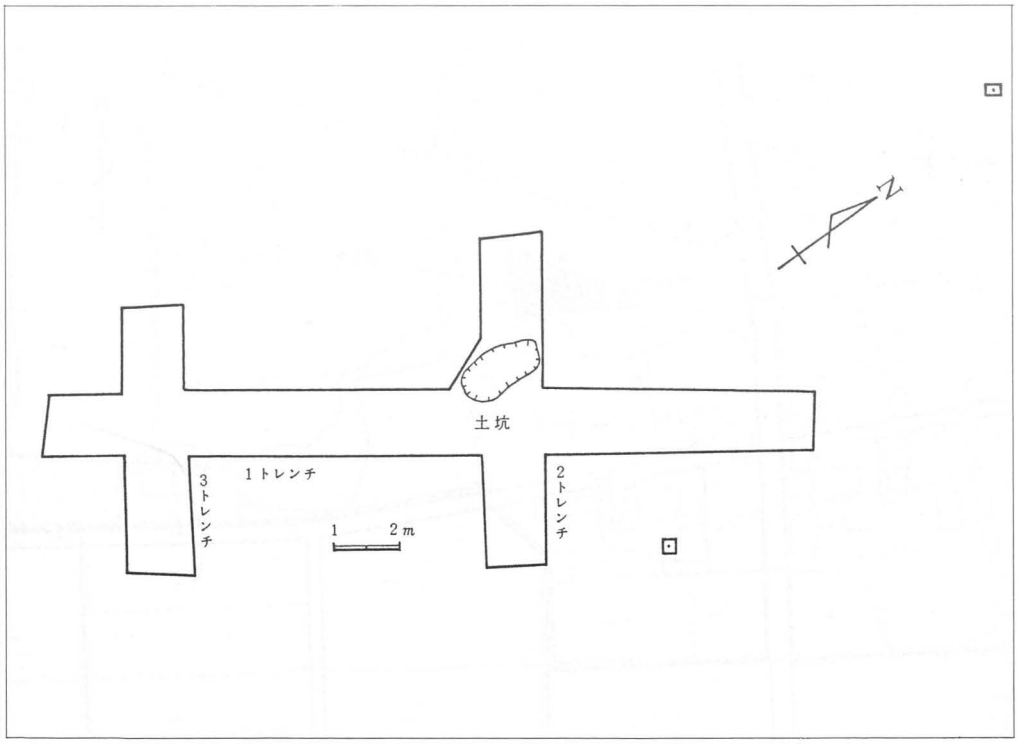


写真７　町谷１遺跡３トレンチ

写真８　町谷１遺跡土坑



第４図　町谷１遺跡調査区全体図

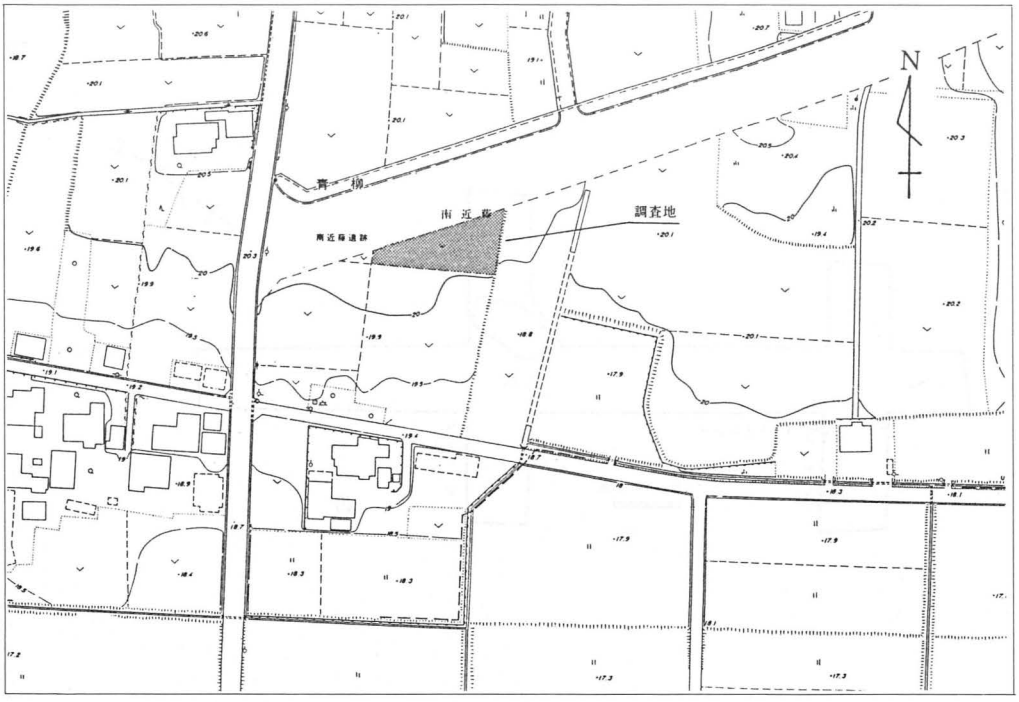
第２節　南近藤遺跡（みなみこんどういせき）

立　地　と　環　境

南近藤遺跡は、館林市西部の近藤沼周辺に分布する遺跡の一つで、近藤沼北岸西部の小規模な舌状台地上に位置している。遺跡地の中央北側には国道３５４号線のバイパスが通り、東はこの遺跡を乗せる洪積台地を南北に開析する小さな谷に面し、西には近藤沼の後背低地が広がっている。

この遺跡は、東の開析谷を隔てた北近藤第一地点遺跡とともに、昭和６２・６３年に上記バイパスの建設工事に伴い発掘調査が実施され、その結果、古墳時代の住居址３軒、奈良時代の住居址１軒の計４軒が確認されている。また、この時行なわれた上記北近藤第一地点遺跡の調査では、鍛冶遺構などのほか住居址２６軒が確認され、それ以前の調査のものも合わせ、この遺跡では古墳時代の住居址３０軒が確認されている。周辺の遺跡には、この北近藤第一地点遺跡をはじめ、古墳・平安時代の苗木遺跡、平安時代の苗木西遺跡、土師器片散布の見られる北近藤第二地点遺跡などがある。

この付近は、近藤工業団地にも近く、国道３５４号線バイパスの開通により、今後大きく開発の見込まれる地域である。



第５図　南近藤遺跡周辺図

経　緯

南近藤遺跡の調査は、館林市大字青柳字南近藤2599－106の地権者茂木久長氏の一般開発に伴う事前確認調査であった。

館林市教育委員会では、茂木氏の開発許可申請に基づき、同地の埋蔵文化財の取り扱いについて協議を開始した。

開発予定地は、遺跡地の中央南寄りで、標高約20ｍ、前記バイパスの南側に面し、前回調査時に確認された住居址に近接する位置となっていた。協議に基づく現地確認の結果、耕作以外に手の入った様子は見られず、若干の遺物散布が見られた。現地は前回の調査結果からも、遺構の存する可能性が高く、事前の確認調査が必要と判断され、再協議を行ない、試掘調査を実施することで了解を得た。

写真９　南近藤遺跡調査前

写真10　南近藤遺跡重機による掘削

調査の概要

調査は、開発が簡易にとどまる開発予定地の西側を除き、東側に重点を置いて、交差する２本のトレンチを設定し進めた。

当初、１トレンチ及び２トレンチの交差付近の土層に変化が見られ、逐次トレンチを拡張し精査した結果、開発予定地の中央東寄りに、壁高約0.65ｍを測る、古墳

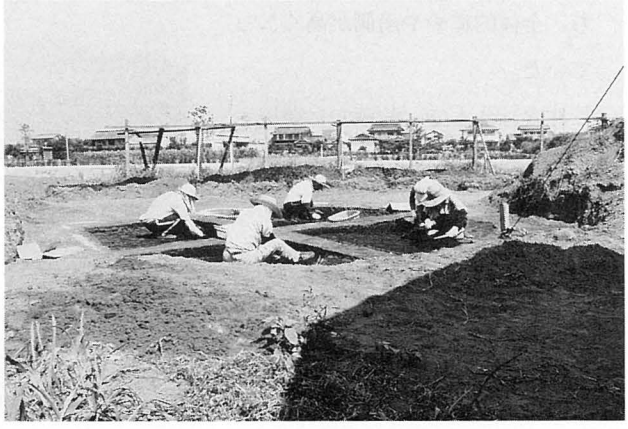


写真11　南近藤遺跡調査作業

時代後期のものと思われる土師器を伴う竪穴式住居址1軒が確認された。

また開発予定地では、0.2m余りの耕作土の直下がローム層となっており、ローム層を削る削平が広範囲にわたっている様子が窺われた。

5号住居址

開発予定地の中央東寄り、1及び2トレンチの交差付近に検出され、北辺及び東辺4.9m、南辺及び西辺4.7mのほぼ正方形に近い平面形となっていた。この住居址は、前回調査の4軒に続くものとして5号住居址としたい。

確認できた壁高は平均約0.65mで垂直に近い。壁溝は、ほぼ壁に沿って全周し、幅0.25m前後で、深さは0.15m余りとなっていた。

床面は、部分的に固くしまっており、北壁の近くでは凹凸が目立ち、全体的にやや南側が高くなっていた。

柱穴は4本で、貯蔵穴に隣接するためか北隅のものがやや内側に寄っていたほかは、ともに壁から1.2m前後で、外形と相似形をなすように配されていた。深さは、最も深い東隅のものが0.85m、浅い北側のものが0.6mであった。

カマドは、西壁の中央やや北寄

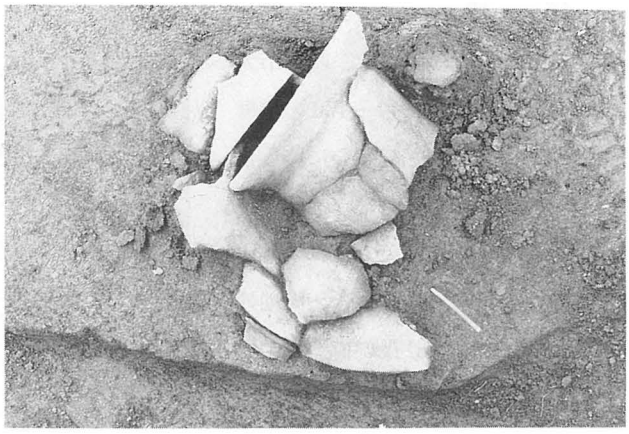


写真12　南近藤遺跡5号住居址遺物出土状況

写真13　南近藤遺跡5号住居址カマド周辺遺物出土状況

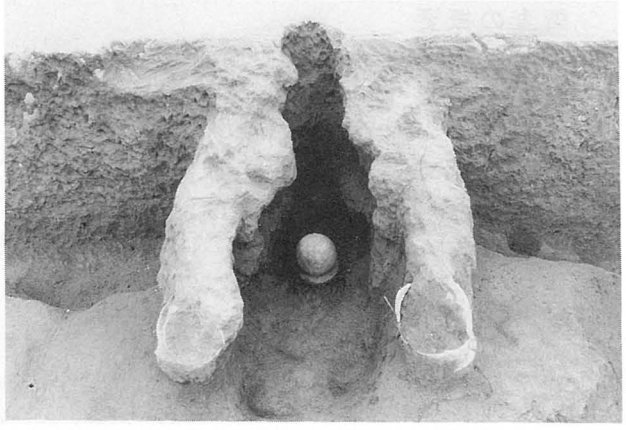


写真14　南近藤遺跡5号住居址カマド

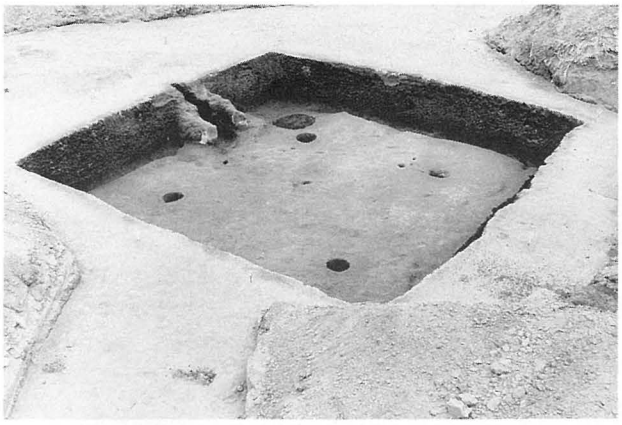
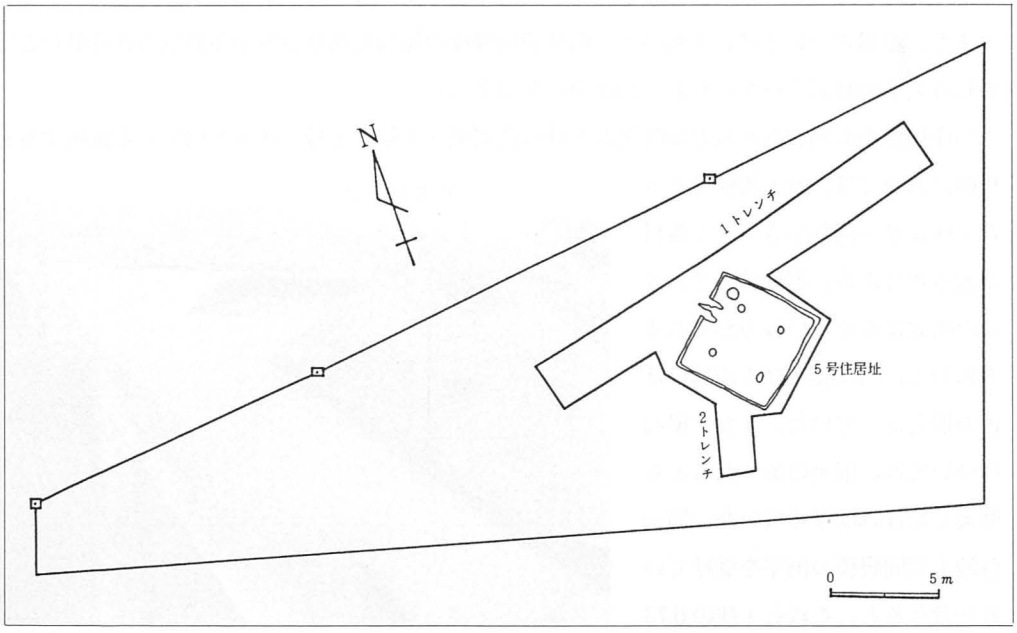


写真15　南近藤遺跡５号住居址

りで確認された。壁際でＬ字型に急角度で立ち上がる煙道を持ち、両袖の焚口部には、長甕の上半部が粘土で固められ伏せた状態で検出され、長甕を焚口部に使用していた様子が窺われた。また、燃焼部のほぼ中央、焼土の上に、支脚として用いられたと思われる完形の小甕１点が伏せた状態で出土した。このほかカマドの周囲には、カマドを取り巻くように床面より０.１ｍ弱の高さを持った半円形のテラスがあり、貼床状に固くしまっていた。カマドの規模は、現状で全長１.１ｍ、幅0.95ｍ、焚口部0.39ｍとなっていた。

貯蔵穴は、カマドに向かって右側、住居址の北隅で確認された。直径０.６ｍ程の円形で、深さは０.３ｍであった。覆土は若干の炭化物を含んだ一様のローム土で、覆土の直上とカマド寄りで遺物が確認されたが、貯蔵穴内では、遺物は見られなかった。

出土した遺物については、口縁部を含めた部分的に接合可能であった長甕８個体、カマドの支脚に使われていた小甕１点のほか、縄文土器片、土師質土器片約６００点が出土した。長甕



第６図　南近藤遺跡調査区全体図

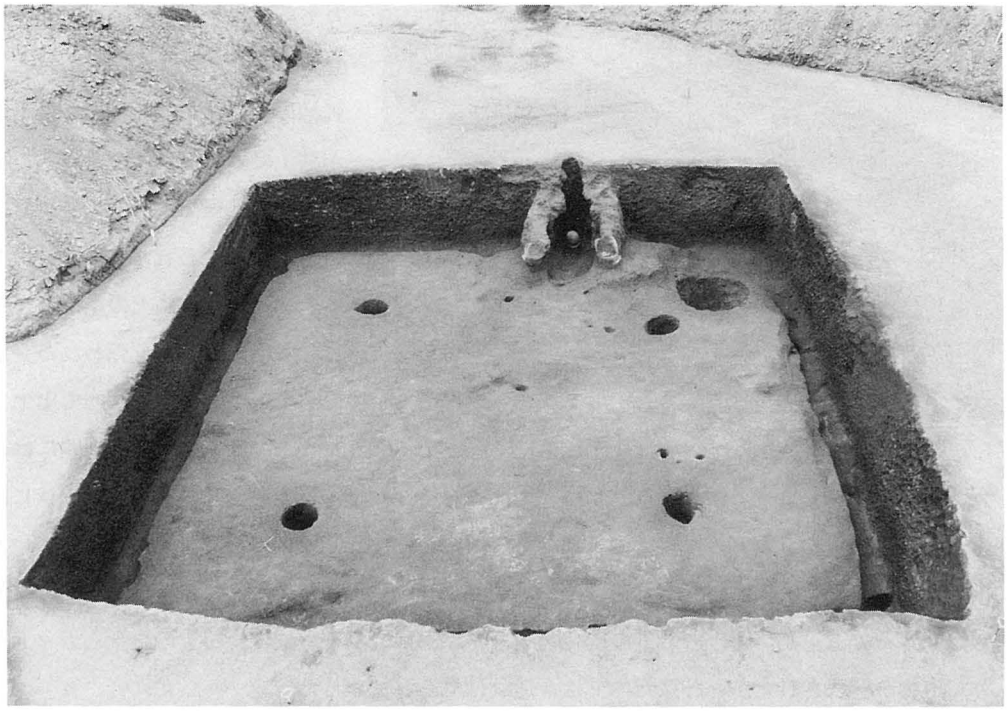


写真16　南近藤遺跡５号住居址

は、カマドの焚口部にあった３個体を含め、いずれも底部、中底部を欠いていた。このほか坏の破片数点が見られたほかは、接合不能な器形の推定できない破片であった。

また、石器については、表面の至る所に刃物痕様の鋭利な切り込みが多数見られる砥石と思われる大小の軽石２点をはじめ、40点余りが出土した。

当住居址を前回調査された同時代の３軒の住居址（１号、２号、３号住居址）と比較すると、規模においては、最大規模であった１住より一回り小さく、２番目の大きさである。形状は、２、３住が南北にやや長い長方形であるのに対し、当住居及び１住はほぼ正方形となっていた。また、壁高については、削平のあったことも勘案しなければならないが、同一台地上で同規模の削平を受けていると考えると、これも１住の0.73ｍに次ぐ高さとなっている。壁溝

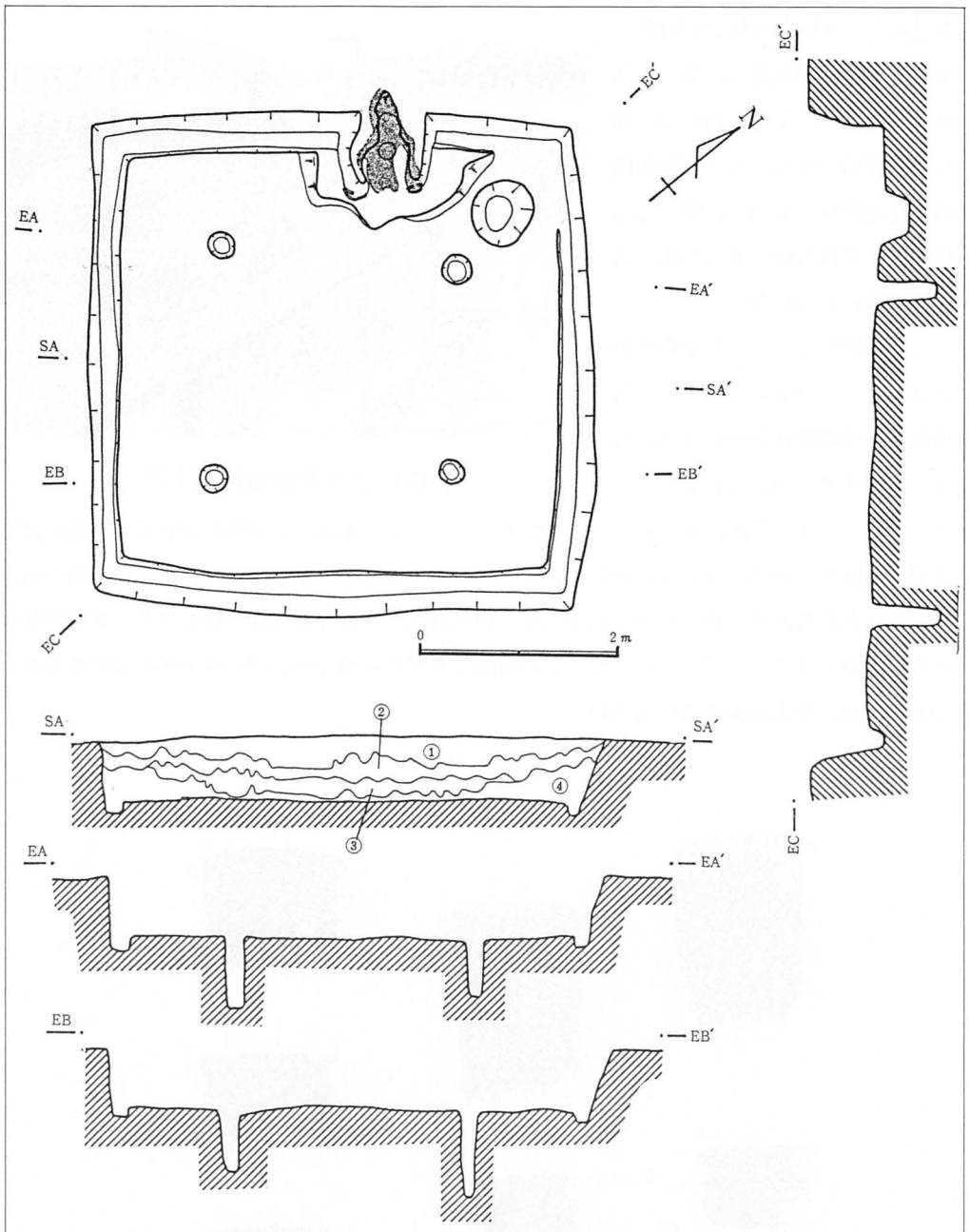
写真17　南近藤遺跡調査区全景

を見ると、１住が当住居と同じく全周しているのに比べ、２、３住はともに南辺、東辺と西辺の一部にのみ認められた。カマドも規模は１住と類似しており、構造も当住居と１住には袖の焚口の部分に長甕が使われていた。

写真18　南近藤遺跡調査区全景

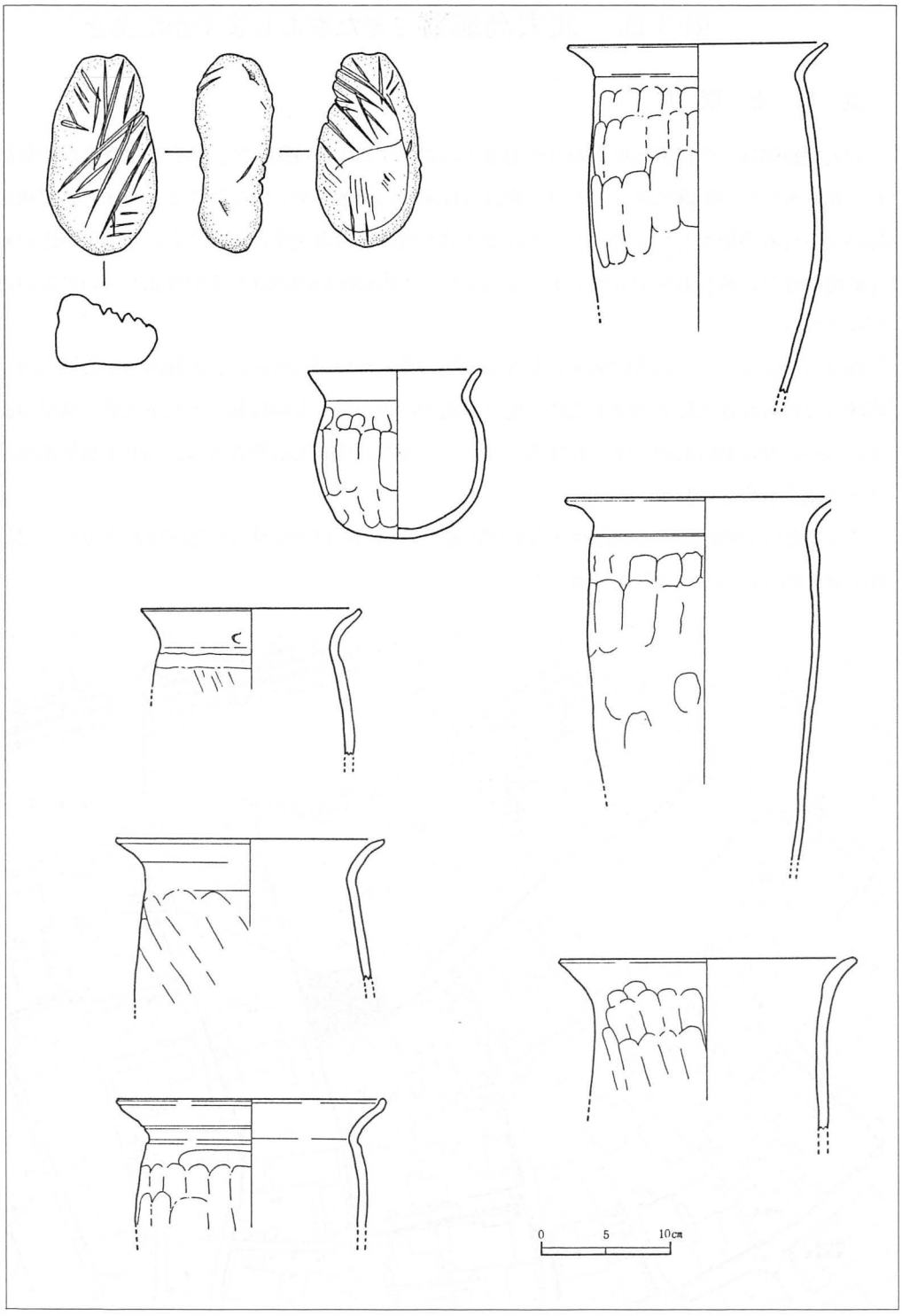
これら極めて限られた調査結果ではあるが、以上のことから、当遺跡での古墳時代後期の住居には２つのタイプが考えられる。一つは、１住と今回の５住に見られるタイプである。一辺が５ｍ前後のほぼ正方形で、竪穴が深く全周する壁溝を持ち、カマドの袖には長甕が使われている。いま一つは、２、３住に見られるもので、形状は前者に比べ小さく長方形で、竪穴は浅く全周する壁溝を持たない。また明確な柱穴を確認することができなかった。この規格とも思える相違が、単に経済的な違いを示すものかどうか、今後の調査に俟ちたい。

写真19　南近藤遺跡５号住居址出土遺物



① 黒 褐 色　粘性無、締り弱。白色テフラ（φ1 ㎜～2 ㎜）多量含有。均質。
② 暗 褐 色　粘性、締り弱。白色テフラ、カーボン、ローム微粒子含有。マーブル状。
③ 黒 褐 色　粘性中、締り弱。焼土、カーボン微粒子中量、白色テフラ少量含有。
④ 暗 褐 色　粘性、締り中。粒子混入は全層中最少。マーブル状。

第７図　南近藤遺跡５号住居址



第８図　南近藤遺跡５号住居址出土遺物

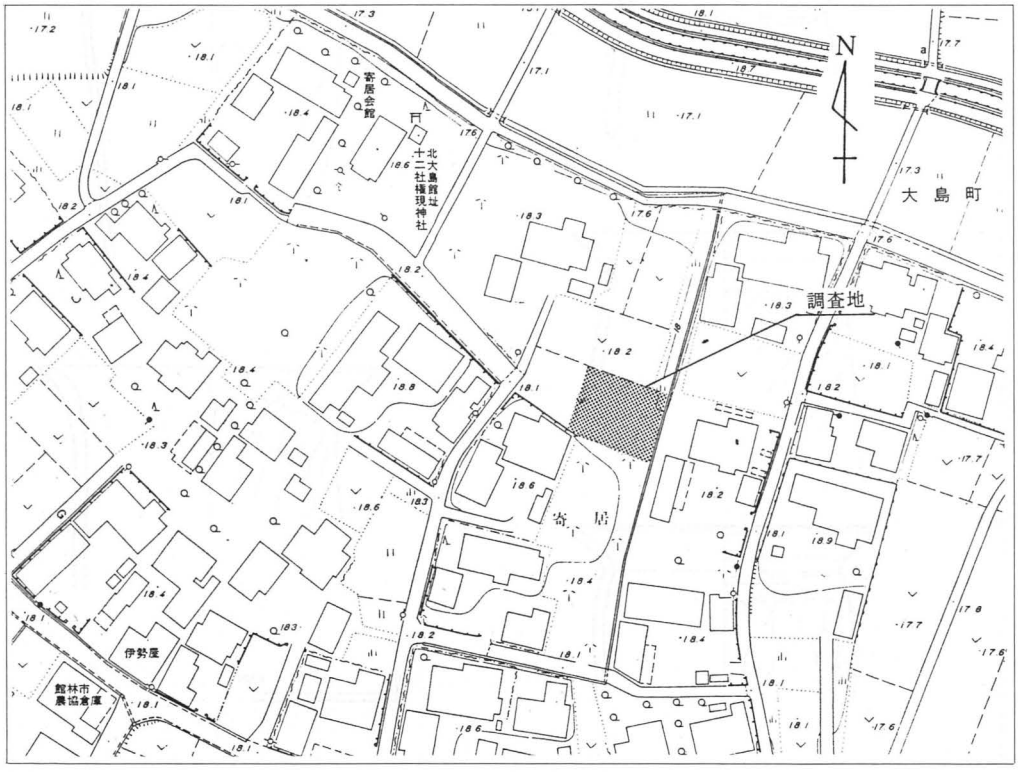
第３節　北大島館跡（きたおおしまやかたあと）

立　地　と　環　境

北大島館跡は、館林市北東部の自然堤防上に位置する中世城館址で、北方には渡良瀬川が流れ、500ｍ余りの距離にある。この一帯は渡良瀬川の氾濫原で、旧河道やよく発達した自然堤防の見られる沖積地となっている。この北大島館跡のある寄居集落の南にも、旧河道を思わせる低地が延び、渡良瀬川の河道が定まる以前は、大小の河川の流れが千変万化していたものと想像される。

周辺の遺跡には、この寄居集落の北方１㎞程の渡良瀬川河川敷内に、古墳から平安時代の土器散布の見られる大島下悪途１遺跡、更に下流500ｍの所にも同時期の大島下悪途２遺跡があり、当時の渡良瀬川氾濫の様子を物語っている。また、寄居集落西方には、同じ中世城館址の磯ケ原城跡が推定されている。

この集落の北側には、県道館林・藤岡線が通り、西側には大島県営住宅団地があるが、周辺は田園に囲まれた静かな農村地域である。



第９図　北大島館跡周辺図

経　緯

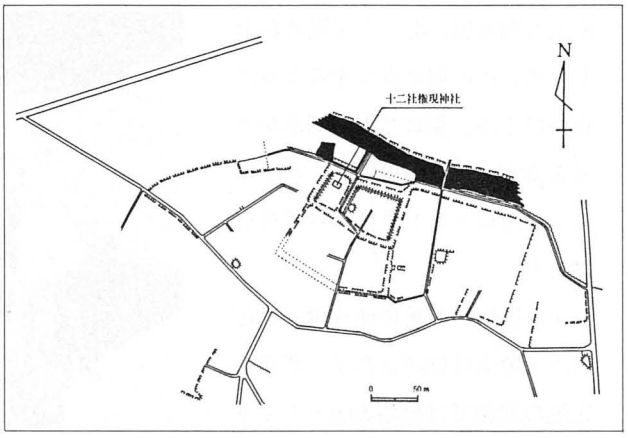
北大島館跡の調査は、館林市大島町字寄居4735－2の地権者清水良雄氏の一般開発に伴う事前確認調査であった。

館林市教育委員会では、清水氏の物置建設に伴う同地の埋蔵文化財の取り扱いについての問い合わせを受け、協議を開始した。

開発予定地は、標高約１８ｍ、「館林市の遺跡」に登載されている北大島館跡のほぼ中央にあたり、寄居集落内の中央北寄りに位置していた。「群馬県の中世城館跡」（群馬県教委発行　１９８８）では堀に相当する部分となっており、協議に基づき現地確認を行なったところ、周辺に比べ落ち込んだ状況が見られ、堀跡を想定させる状態となっていた。このため、事前の確認調査が必要と判断され、再協議の結果、遺構等の有無確認のため試掘調査を実施することで了解された。

調査の概要

調査は、開発予定地全体が東西に延びる堀跡であるという想定から、当初、堀に直交するように南北に２本の平行するトレンチを設定した。しかし、地権者等周辺住民からの聞き取りにより、東側に



第10図　北大島館跡略測図（群馬県教委「群馬県の中世城館跡」）

写真20　北大島館跡調査前

写真21　北大島館跡重機による掘削

南北方向の堀のあった可能性が出たため、この堀に直交するように東西に１本、更に２本の堀が交わると推定される南東隅に１ケ所の計４ケ所のトレンチにより調査を進めた。

その結果、城館に伴う堀と推定される遺構は確認されず、開発予定地の北側では現地表面下1.2ｍ程の所に、河川を思わせる粗い砂の層の厚い堆積が見られた。この層は南へ向かって緩やかに下り傾斜しており、トレンチの南端付近で傾斜を強め、そのまま隣接地へ向かって延びていた。この傾斜した砂層中には薄い微粒の砂層、黒褐色の水性堆積層等の自然堆積層が見られたが、その上層は、トレンチ北端の粗い砂層から水平に直線的に延びる、削平、埋め立てと考えられるほぼ一様な厚い層となっていた。また、南端付近の砂層の落ち込んでいる部分からは、前述の削平により北へ向かって立ち上がる所で途切れていたが、遺物の出土状況から18世紀後半の浅間Ａ降下軽石層と思われるレンズ状の火山灰層が見られた。

これらのことから推測される開発予定地の景観的状況は、いずれも時期の特定はできないながら、かつて南側隣接地に中心を持つ川

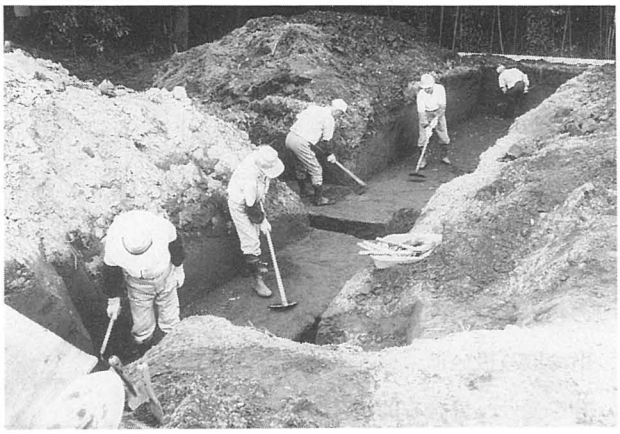


写真22　北大島館跡調査作業

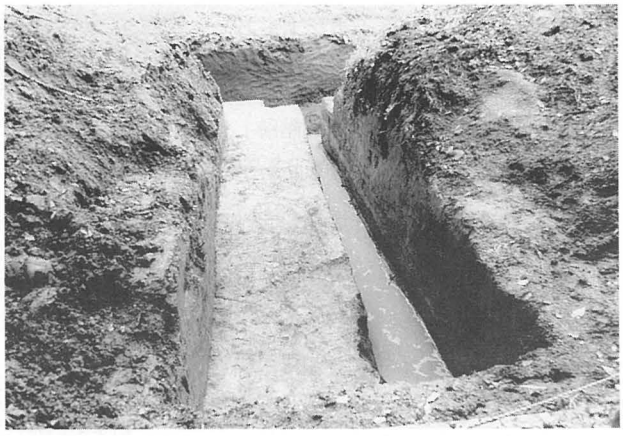


写真23　北大島館跡１トレンチ

写真24　北大島館跡２トレンチ

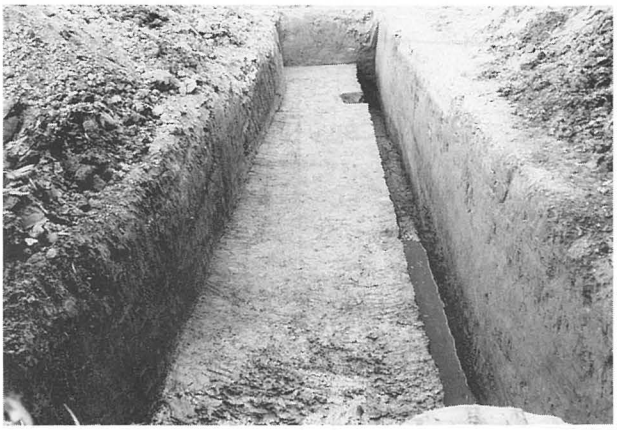


写真25　北大島館跡３トレンチ

写真26　北大島館跡調査区全景

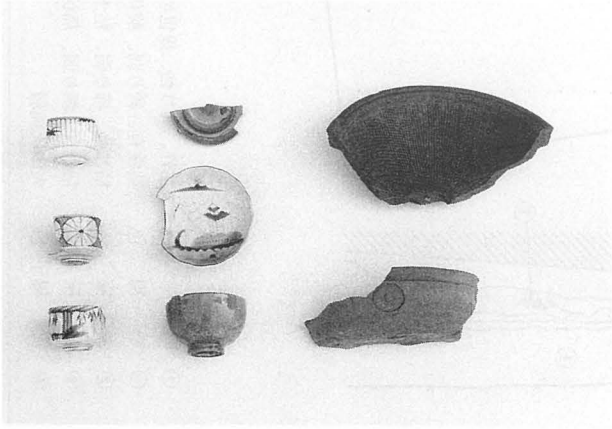
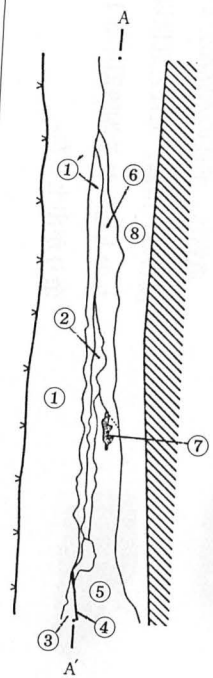


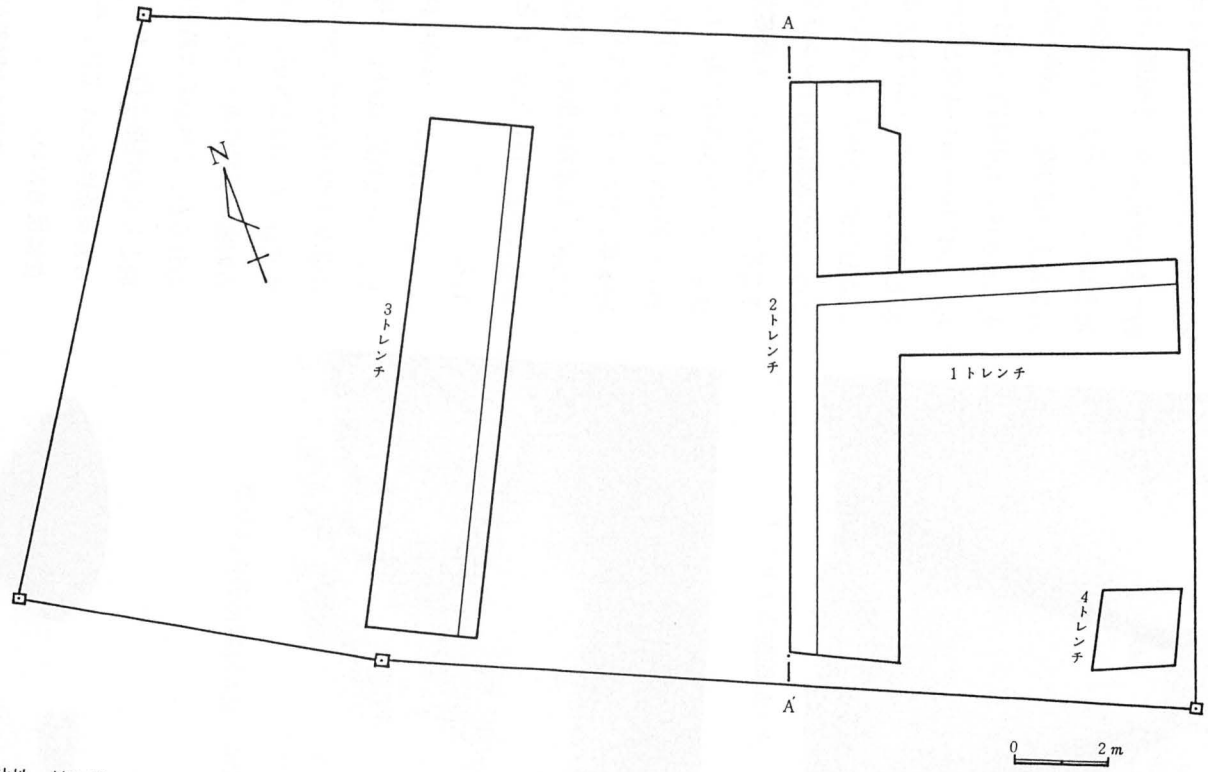
写真27　北大島館跡出土遺物

が流れ、その川床、河川内であった時期があり、やがて何らかの影響で流れが止まり、小規模な沼沢地となった。その後、土の流れ込み等により陸地化し、浅間山が噴火した前後の天明年間（1781～1789）には現在に近い状態となり、現在側溝となっている南側と東側は素掘り様の水路となっていた。この二つの水路は４トレンチ付近で交差し、今回出土した陶磁器片はすべてこの水路内であったと思われる部分から出土しており、当時遺棄されたものと考えられる。この後、大規模な削平、埋め立てが行なわれ、現在に至ったと思われる。

今回の調査では、城館に伴う堀としての人為的な掘削、土留め等の施設は認められず、かつて旧河道であったこの土地が、水を湛える堀様の状態にあったことは考えられるが、これが北大島館に伴う堀としての性格を持ったものであった可能性については、今後の調査に俟ちたい。

遺物は、前述の水路部分から、湯呑み、摺鉢、皿など近世以降のものと思われる陶磁器片等140点余りが出土した。





① 暗オリーブ褐色　粘性、締り強、後世における客土か。
①′ 赤　褐　色　粘性有、締り弱、酸化鉄多量凝集、シルト粒子混入。
② 黄　灰　色　粘性強、締り弱、粘土層。シルト粒子混入。
③ 黄　灰　色　粘性有、締り弱、島状に酸化鉄凝集。
④ 灰　褐　色　火山灰純層
⑤ 黒　褐　色　粘性、締り有、泥炭様水性堆積層。遺物を含む。
⑥ 灰オリーブ色　粘性、締り弱、微粒砂、シルト層。古河床か。
⑦ 赤　褐　色　酸化鉄凝集
⑧ 灰　褐　色　粘性、締りなし、φ1㎜以上の粗砂層。島状に酸化鉄凝集。

第11図　北大島館跡調査区全体図

第４節　大袋城遺跡（おおぶくろじょういせき）

立　地　と　環　境

大袋城遺跡は、館林市東部の古城沼に面する中世城館址で、半島状に西から古城沼へ突き出す洪積台地の上に位置し、邑楽・館林台地に続く西側を除いた三方は、古城沼及びこれに伴う低湿地に囲まれている。また、北方には市内有数の池沼である城沼が東西に横たわり、変化に富んだ景観を見せている。

周辺、特にこの大袋城遺跡を含めた城沼の南側には、縄文から中世へ至る遺跡が点在しており、縄文時代の大袋Ⅰ遺跡、大袋Ⅱ遺跡、花山東遺跡、下志柄遺跡、縄文・平安時代の大袋４遺跡、平安時代の大袋３遺跡、大袋５遺跡、古墳では富士山古墳、下志柄古墳、町谷１号墳、中世城館址の青山屋敷跡などがある。このうち、昭和５５・５６年度に調査された大袋Ⅱ遺跡では縄文時代の住居址１０軒が確認されている。

現在この付近に目立った開発はなく静かな農村地域となっているが、遺跡地南に隣接して県道新設の計画があるほか、北方の県立つつじが岡公園東に建設中のサイクリングターミナルに

第12図　大袋城遺跡周辺図

も近く、今後開発の見込まれる地域である。

経　緯

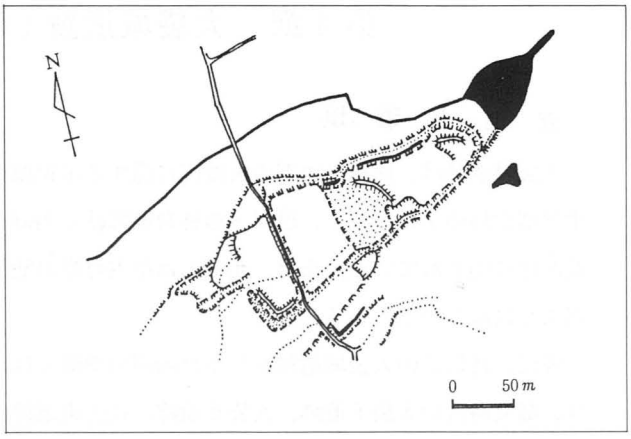
大袋城遺跡の調査は、館林市花山町字大袋2298－1の地権者田部井博氏の一般開発に伴う事前の確認調査であった。

館林市教育委員会では、田部井氏の開発許可申請に基づき、同地の埋蔵文化財の取り扱いについて協議を開始した。

開発予定地は、「館林市の遺跡」に登載されている「大袋城跡」の中央西寄りで、標高は20ｍ弱、前記半島状の台地の西端部、付け根の部分であった。「群馬県の中世城館跡」（群馬県教委発行　１９８８）では二の丸の郭内にあたり、協議に基づく現地確認でも、開発予定地の西半部には土塁を思わせる盛り土があり、南側隣接地にも同様の盛り土が見られ、城館の郭内と思われる部分となっていた。また、周辺の遺跡の立地状況から、城館に伴う遺構以外に時代を異にする遺構等の存在も推定されることから、再協議の結果、試掘調査を実施することで了解を得た。

調査の概要

開発予定地は、以前耕作地とし



第13図　大袋城遺跡略測図（群馬県教委「群馬県の中世城館跡」）

写真28　大袋城遺跡調査前

写真29　大袋城遺跡調査作業

て利用され、そのため北側部分では大きく土地を削平した経緯があり、随所に**攪乱**が予想された。従って、調査は大規模な削平を受け、遺構等の破壊が考えられる北側部分を除き、掘削の計画されている東側に重点を置いた3本のトレンチを設定し進めた。

このトレンチ調査により、1トレンチ北端付近、1トレンチと2トレンチ、及び2トレンチと3トレンチの交差付近の3ケ所に土層の変化が見られたため、この土層を追い逐次トレンチを拡張し精査した結果、2軒の竪穴式住居址が確認された。住居址は、2及び3トレンチの交差付近に確認されたものを1号住居址、1トレンチ北端のものを2号住居址とした。また、1及び2トレンチの交差付近に見られた土層の変化は、後世の耕作等による**攪乱**と判断された。

遺物については、石片等150点余り、縄文土器片、土師質土器片等土器片が約600点出土したが、器形の推定し得たものは2点のみであった。

また、調査前に土塁と思われた開発予定地内の盛り土は、戦後北側部分を削平した際の土であることが判明した。今回の大袋城遺跡は、中世城館址としての遺跡であ

写真30　大袋城遺跡1号住居址遺物散布状況

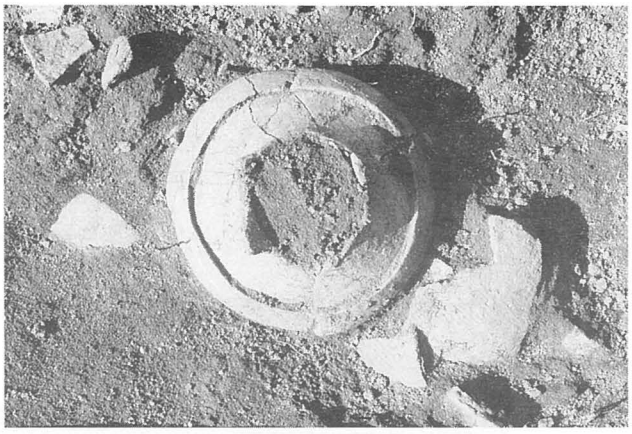


写真31　大袋城遺跡1号住居址遺物出土状況

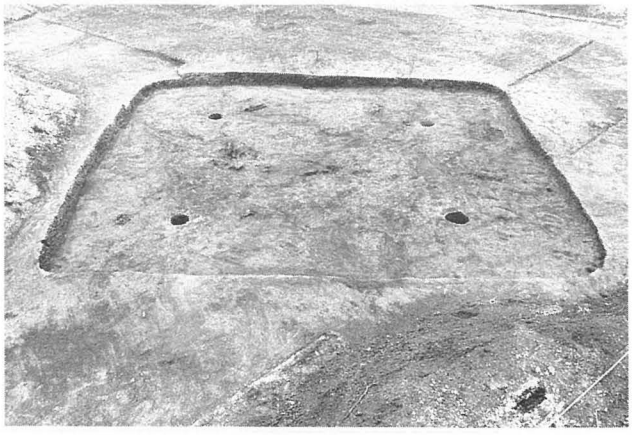
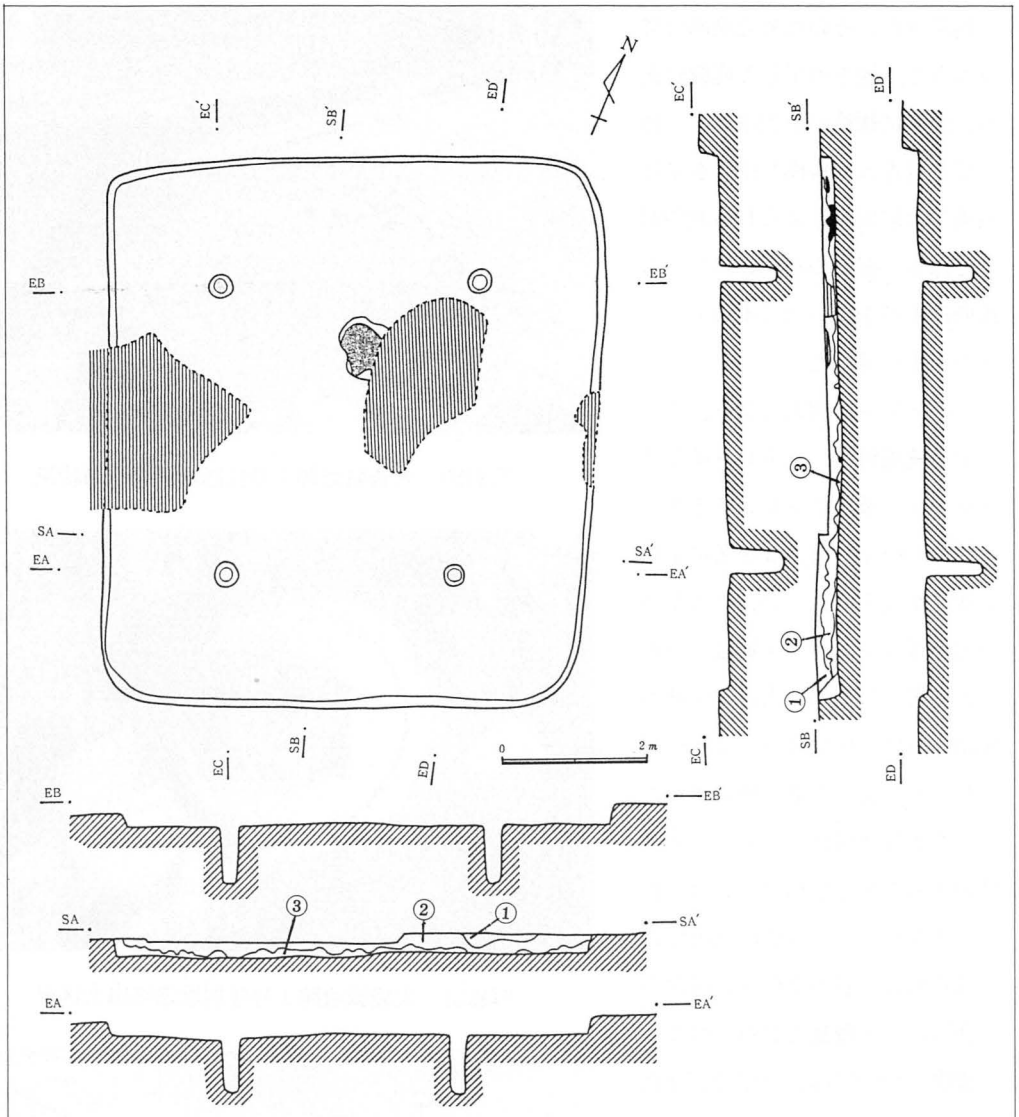
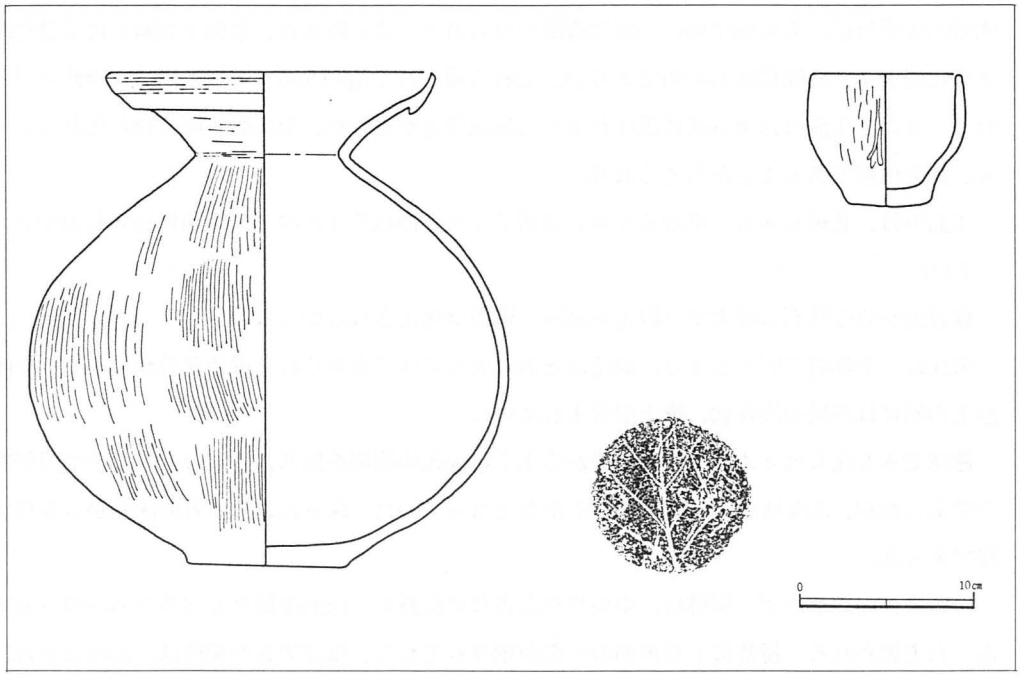


写真32　大袋城遺跡1号住居址



① 暗褐色　粘性、締りともに弱く、砂質土を含む。
② 褐　　色　粘性、締りともにやや有り。
③ 暗褐色　粘性、締りともにやや有り。ローム粒子、カーボン粒子を含む。

第14図　大袋城遺跡１号住居址



第15図　大袋城遺跡１号住居址出土遺物

ったが、城館に関わる遺物、ピット等の遺構は確認されなかった。これは、元来この土地には大袋城の遺構が伴っていなかったのか、後世の破壊により検出されなかったのかは不明である。

当遺跡は、当初中世の城館址と推定されていたものであるが、今回の調査により、明らかに中世とは時代の隔たる竪穴式住居址が確認されたことから、名称を大袋城遺跡としたい。

１号住居址

開発予定地南辺のほぼ中央、２及び３トレンチの交差付近に検出され、住居址内中央の炉跡付近、

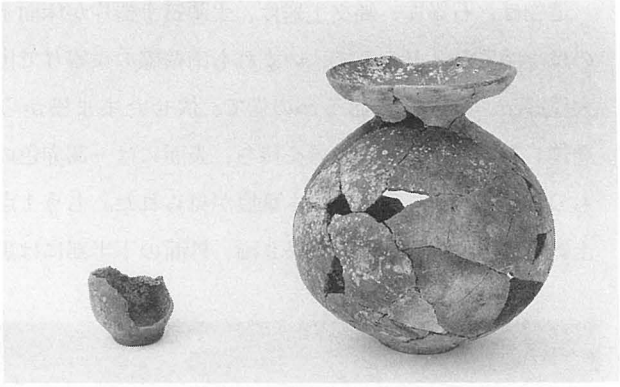


写真33　大袋城遺跡１号住居址出土遺物

写真34　大袋城遺跡１号住居址出土遺物

西壁の中央付近、東壁際中央の一部に**攪乱**が見られた。構築時期は、器形を判断し得る遺物が２点に過ぎず、器種構成も不明であるが、これら限られた遺物からすると古墳時代前期と思われる。また、床面には至る所に焦げたような黒色部分が見られ、全体的に炭化物が広がっており、焼失住居であることが考えられる。

平面形は、北辺6.8ｍ、南辺6.5ｍ、東辺7.4ｍ、西辺7.4ｍのやや東西に長い長方形となっていた。

確認面からの壁高は最大で0.27ｍを測り、壁溝は検出されなかった。

床面は、全体的に固くしまり、前述のとおり火災に伴うと見られる黒色部分が広がり、床面直上の層には多量の炭化物、焼土が含まれていた。

確認できた柱穴は４本で、ともに壁から1.7ｍ前後の間隔を持ち、西側の２本がやや西壁寄りであったが、ほぼ外形と相似形をなす位置となっていた。深さは、いずれも床面から0.75ｍ程であった。

貯蔵穴は検出されず、炉跡は、中央やや北寄りに位置し、床面を掘りくぼめたのみのものであったと思われる。**攪乱**により東側の一部が壊されており、確認できた規模は、長径0.8ｍ、短径0.5ｍ、深さが0.15ｍ程で、炉内には多量の焼土が認められた。

遺物は、石器片、縄文土器片、土師質土器片が床面上に散漫に散布し、器形の復元できたものは土師器が２点のみで、いずれも南壁際の東寄りで出土した。一つは、高さ28㎝、胴部の最大径27㎝、口縁部径18.5㎝の壷で、伏せたまま横から押し潰されたような状態で出土した。発達した折り返し状の口縁を持ち、表面には一部赤色の塗彩が認められ、全面に施されていたものと思われる。底部には木葉痕が見られた。もう１点は、湯呑み型の全体に歪みのある手捏土器で、高さ7.5㎝、最大径９㎝、外面の下半部には黒色の煤の付着が見られた。

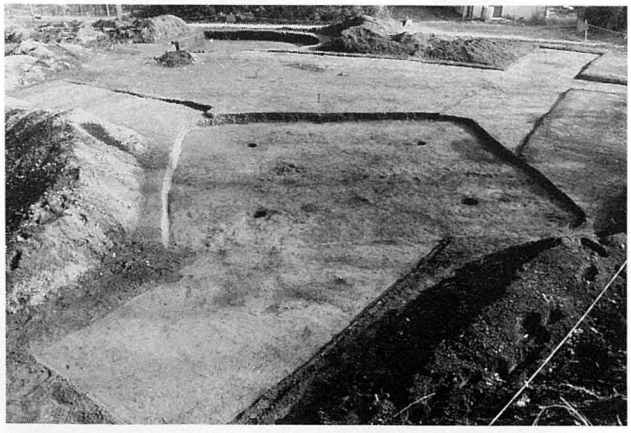


写真35　大袋城遺跡調査区全景

２号住居址

開発予定地東辺のほぼ中央、１トレンチの北端に検出されたが、西壁の一部と南壁の僅かな部分を残し、大半が破壊され全体規模を捉えることはできなかった。構築時期については、出土遺物が少なく、器形を推定し得る出土遺物がないため不明である。

住居址の東側と北側の大半が失

われていたため、平面形は不明であるが、破壊を免れた南西隅の壁が大きく曲線を描いて東と北へ直線的に向かっていることから、隅丸型の方形をなしていたものと推定される。残存する西辺の長さは約6ｍであった。

確認面からの壁高は最大で0.44ｍを測り、ほぼ垂直な立ち上がりとなっていた。壁溝は、幅約0.15ｍ、深さは0.1ｍ前後で、一部を除き西壁に沿っていたためほぼ全周していたことも考えられる。

床面には、余りしまった様子は見られず、全体的にやや西側が高くなっていた。

確認できた柱穴は南西隅に1本のみで、西壁から約1.7ｍ、南壁からは推定約2ｍ、深さは0.75ｍであった。西壁との間隔が短く、1住以上に西壁に寄っていた可能性もある。

貯蔵穴は検出されなかった。炉跡も、明確に炉跡と考えられるものは認められなかったが、全体にしまりの見られなかった床面で、西壁から約1.5ｍ、北側の**攪乱**に接するあたりに、炉跡様の焼土、炭化物を含むしまった部分が確認された。しかし、このしまった部分も全体的にしまってはおらず、床面上にしまった部分としまりの

写真36　大袋城遺跡2号住居址遺物散布状況

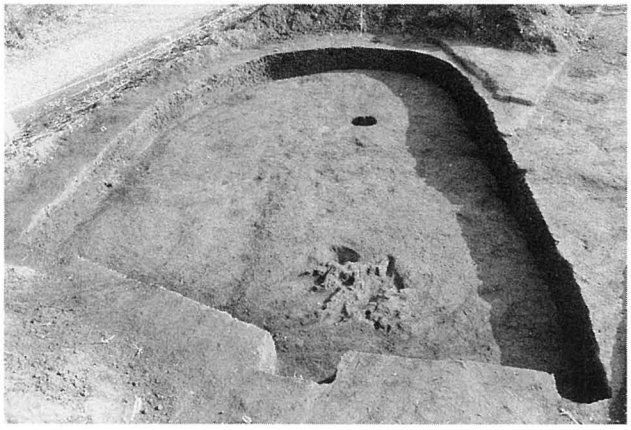
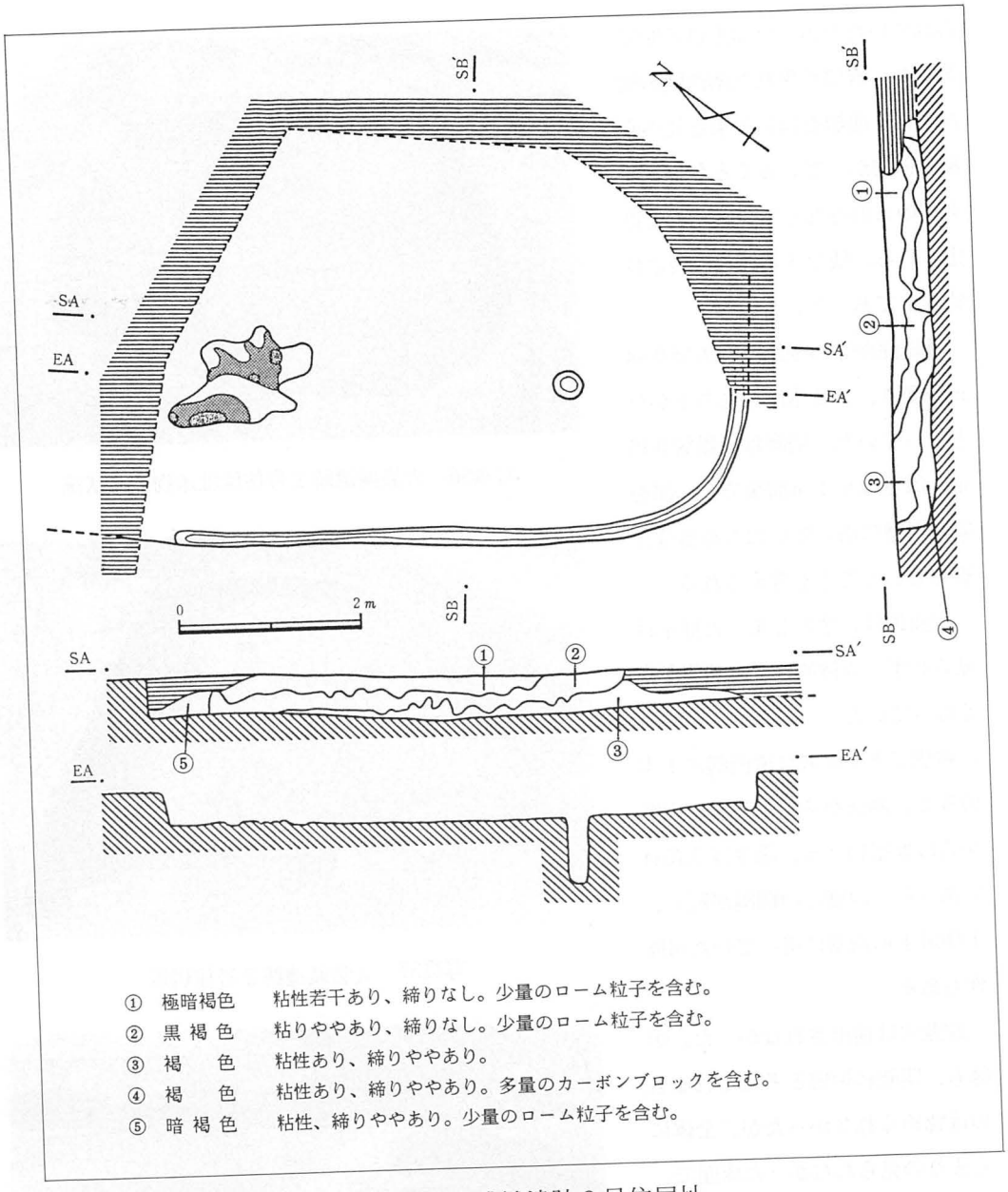


写真37　大袋城遺跡2号住居址

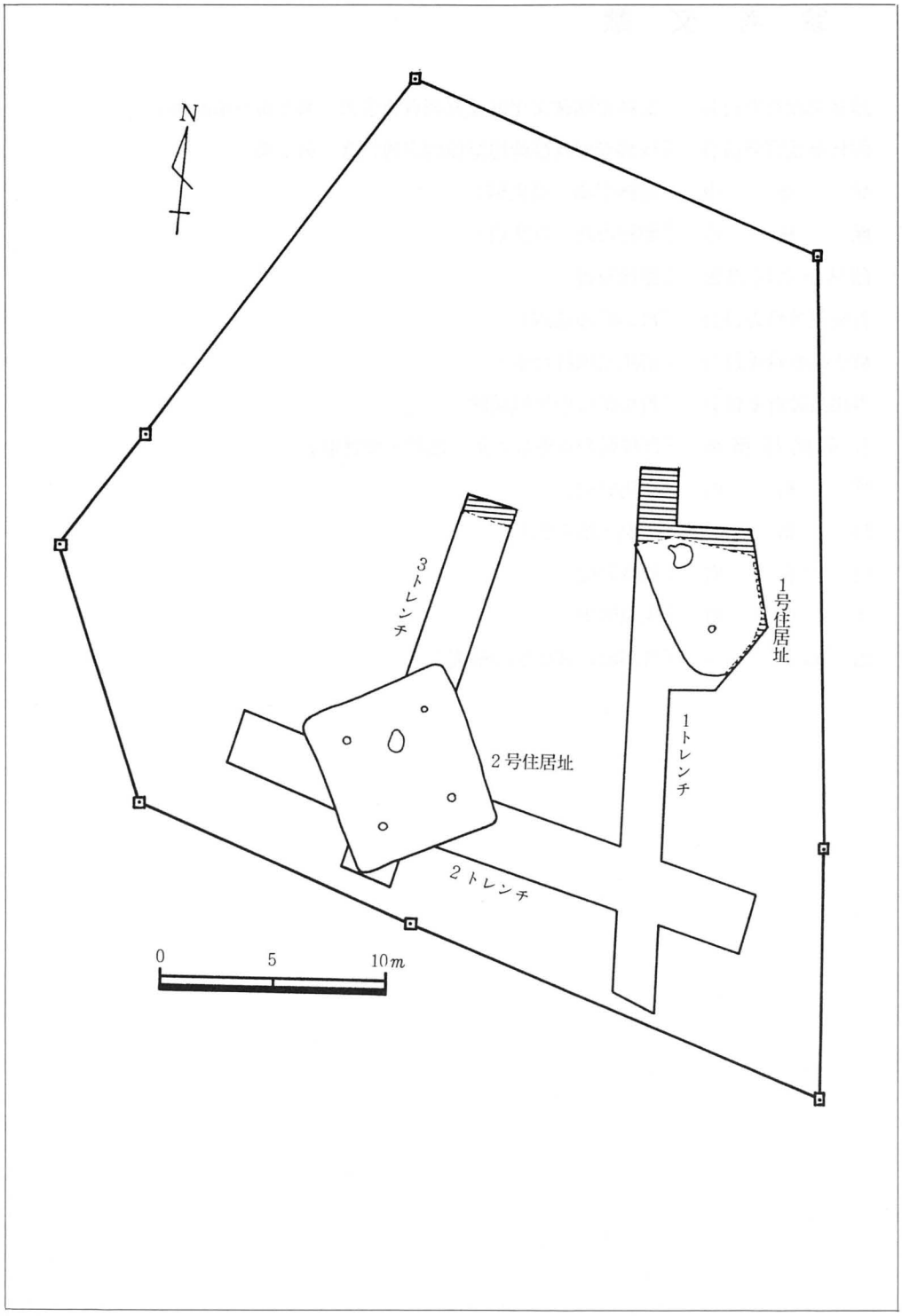
写真38　大袋城遺跡調査区全景



第16図　大袋城遺跡２号住居址

見られない部分が不規則に混在していた。大きさは南北1.2ｍ、東西1.7ｍの不定形な形状を呈し、全体的に床面より盛り上がっていた。この部分は、住居の中で壁に寄っており柱穴であることも推定されたが、確認することはできなかった。

遺物は、残存する壁際に若干の分布が見られたが、量は少なく大半が土師質の土器片で、器形を復元し得るものはなかった。



第17図　大袋城遺跡調査区全体図

参　考　文　献

館林市教育委員会　「館林市埋蔵文化財発掘調査報告書　第１集～第23集」

館林市教育委員会　「茂林寺沼及び低地湿原調査報告書　第２集」

館　　林　　市　「館林市誌　歴史篇」

館　　林　　市　「館林市誌　自然篇」

館林市立図書館　「館林双書」

群馬県教育委員会　「群馬県の遺跡」

群馬県教育委員会　「群馬県遺跡台帳」

群馬県教育委員会　「群馬県の中世城館跡」

群馬県林務部　「群馬県の貴重な自然　地形・地質編」

群　　馬　　県　「群馬県史」

群　　馬　　県　「上毛古墳綜覧」

板　　倉　　町　「板倉町史」

大　　泉　　町　「大泉町史」

山　崎　　一　「群馬県古城塁址の研究」

抄　録

フリガナ	タテバヤシシナイイセキハックツチョウサホウコクショ
書名	館林市内遺跡発掘調査報告書
副書名	－
巻次	－
シリーズ名	館林市埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	24集
編著者名	川島孝男
編集機関	館林市教育委員会
所在地	〒374 群馬県館林市城町1－1
発行年月日	西暦1993年3月31日

フリガナ 所収遺跡	フリガナ 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 m²	調査原因
マチヤイチ 町谷1	館林市 クスノキチョウアザマチヤ 楠町字町谷	10207	77	－	－	19920629 19920709	70	事務所
ミナミコンドウ 南近藤	館林市 オオアザアオヤギアザミナミコンドウ 大字青柳字南近藤	10207	91	－	－	19920824 19920918	80	店舗
キタオオシマヤカタ 北大島館	館林市 オオシマチョウアザヨリイ 大島町字寄居	10207	20	－	－	19920916 19921007	70	物置
オオブクロジョウ 大袋城	館林市 ハナヤマチョウアザオオブクロ 花山町字大袋	10207	69	－	－	19921111 19921204	170	工場

所収遺跡名	種別	時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
町谷1	－	－	土坑　1基	－	－
南近藤	住居	古墳	竪穴住居　1軒	長甕　8 小甕　1 砥石(?)　2	－
北大島館	－	－	－	陶磁器片	旧河道
大袋城	住居	古墳	竪穴住居　2軒	壺　1	うち1軒は時代不詳

館林市埋蔵文化財発掘調査報告書　第24集

館林市内遺跡発掘調査報告書

発　　行　館林市教育委員会
印刷所　中塚印刷所
発行年月日　平成5年3月31日

文化財愛護シンボルマーク
ふる郷の文化と歴史を見なおそう